

1 本当の恋人

「かなり魔力が増えましたね。もう、ほとんど普通の人と変わらないくらいだと思いますよ」

「……ありがとうございます」

あれからレオニス様と定期的にセックスをしてきたおかげで順調に魔力は増えている。

「ラフレ、なんだか嬉しくなさそうね」

クラウス先生が帰った後、ニヤニヤした顔で言ってくるセレナ。

「そ、そんなことないよ！嬉しいよ！やつと普通の人と同じくらいの魔力になったんだもん！」

「そう？てつきり、レオニス様との関係に終わりが来てしまうのが悲しいって顔してるように見えたから」

「そ、そんなことないよ……！」

否定したが、凶星すぎて、しゅんと落ち込んでしまう。

「ラフレ、素直にならないと、レオニス様モテるんだから取られちゃうわよ」

「……………」

じわりと涙で視界が滲んでくる。

「泣いちゃうくらい好きなら本当の恋人にしてくださいって言うてみたら？私からみてもレオニス様はラフレのこと特別扱いしてると思うけどね。恋人のふり以上に」

「……そう、かな……甘々だなんて思うけど、そもそもレオニス様、女性に対してはそれが普通なのかもしれないし……」

「……そんなわけないでしょ！」

と、笑い出すセレナ。

「レオニス様は、女性に冷たい人で有名なのよ！？ラフレの相手にレオニス様を勧めたとき、少し不安だったのよね。小さい頃、レオニス様と遊んでいたって知ってたけど、大人になってからのレオニス様とは関わりがないって言ってたから」

「そ、そうなんだ……レオニス様のこと冷たいって思ったことないから、その話、あんまり信じられない……」

「ラフレと話してる時の表情なんて見たことないくらい甘かったわ……！あの顔見てメロメロになってる女、いっぱいいたわよ。ラフレも本気出さないとね」

レモンティーを飲みながら、マカロンを頬張るセレナは、焦っている私を見て楽しんでるようだった。

「それはそうと、今日、家族に話すんでしょ？魔力のこと」

「そ、う……………緊張するわ……………でも、先生にも普通の人と同じくらいの魔力って言われたし、自信を持ってみんなに言う……………！ずっと心配かけてたから……………セレナも、色々ありがとう……………私が変われたのは、セレナのおかげだよ……………」

「友達なんだから、困ってたら助けるのは当たり前でしょ？」

少し涙ぐんでいるセレナ。

「ラフレ、お話があるってどうしたの？」

「何か、悩んでいるのか……………」

「お兄ちゃんに言ってみろ。全部解決してやるから」

引きこもりになってから、家族は、一段と過保護になってしまった。

「あの、ね……………みんな気づいていたかもしれないけど、学園に急に行けなくなったの、魔力がないことを馬鹿にされちゃったのが原因でね……………馬鹿にされるのが私だけなら、引きこもりでもいいかなって思ってたんだけど、家族も馬鹿にされちゃったことがあってね。私、変わらなきゃいけないって思ったの……………それで、セレナにお医者さんと呼んでもらって、レオニス様にも色々頼んでね……………なんとか普通の人と同じくらいの魔力になれたんだ……………」

恥ずかしくて、怖くて、俯いたまま話した。なんの反応もなくて、心配になり、顔を上げると、目から涙を流す母、優しい表情で見守る父、なぜか得意げな表情をしている兄。沈黙を破ったのは母で、ぎゅっと私を抱きしめて、

「ラフレには、ずっと苦しい思いをさせてごめんなさいね……」

「ううん……何も言わず、見守ってくれたでしょ？優しい家族のもとに生まれてこれてよかったって思ってるんだよ、お母さん」

父、兄も、大きな手で頭をポンと撫でてくれて、優しい雰囲気にも包まれる。

「ラフレ」

「何？お兄ちゃん」

「レオニスには、何を頼んだんだ？てか、本当に恋人同士なのか？弱み握られてるとかないよな？急に恋人になったって言い出した時から怪しいと思ってたんだ」

「う……………（言えない……………魔力を増やすためにエッチしてほしいとお願ひしたなんて……………交換条件で恋人のふりをしてるだけで、本当の恋人じゃないだなんて……………！！ど、どうしよう……………なんて誤魔化そう……………）」

無言で俯いていると、痺れを切らした兄がまた話し始める。

「まあ、本当に付き合ってるならいんだが……あいつ女に冷たいくせにモテるからな。ラフレが傷付かないかなと思って心配になっただけだ」

「や、やっぱり、レオニス様ってモテるの……？」

「あの容姿なんだから、当たり前だろ？まあ、特定の誰かと親しい関係になったことは多分ないと思うが……最近だと、レティス様のアピールがすごいって噂で聞いたな」

パーティでセレナも口にしていた名前だわ……！

「まっ、ラフレは心配しなくてもいいだろう？レオニスの恋人なんだから」

頭の中にもやもやが残ったまま、レオニス様に誘われ、デートに来てしまった。

「ラフレ？元気がないのか？」

「い、え！そんなことはありません！！」

「そうか？少し大事な話があるんだがいいか？」

落ち着いた雰囲気のカフェテラスで、人気のアップルパイと、紅茶を飲んでいると、真剣な表情でティーカップを置くレオニス様。私もつられて、ティーカップをゆっくりと置く。「な、なんでしょうか……（どうしよう……この関係を終わりにしようって言われたら……）」

「来週から1ヶ月ほど遠征で王都を離れることになってしまったんだ。西の森で魔物の集団が確認されたらしくてな」

想像していた話と全く違う話をされ、少しの間思考が停止したが、魔物という単語が頭の中で反復する。

「魔物……………」

「遠征で討伐はよくある話なんだ。ここ最近、ラフレとの時間を大事にしたくて断っていたんだが、数が数で私も討伐に参加しなくてはならない状況でな」

「そうなのですね……………お気をつけてください……………怪我、しないでください……………」
来週から1ヶ月も会えなくなることに寂しさを感じるとともに、危険な場所に行く心配で胸が張り裂けそうになった。グツと唇を噛んで、涙を堪える。

「ラフレ、そんなに寂しがらないでくれ。帰ってきたらいっぱいセックスしよう」

「そ、外でそんなこと言わないでください……………」

「遠征から帰ってきたら真っ先にラフレの元へ会いに行くから、いい子で待っていてくれ」
「いい子で待ってます……………いい子で待ってるので、怪我しないで帰ってきてください……………」

「わかった。約束する。遠征から無事帰って来られたら頑張ったご褒美をくれるか？」

「私でもあげられるものでしたら……………」

「いつもより頑張れそうだな……」

馬車の中で、軽いキスを交わして家まで送ってもらった。

「遠征行くの久しぶりじゃないか？」

エントランスを出たところにラフレの兄、ロディオが柱にもたれかかっていた。

「ああ、ここ最近、断っていたからな」

「寂しいんじゃないか？毎週ラフレと会ってみたいだしな。遠征断ってたのも、ラフレとラブラブしたいからだろう？」

弱みを握ったことをここぞとばかりに馬鹿にするネタに使ってくるロディオ。

「それはそうと、ラフレにカマかけた様子だと、まだちゃんと恋人になってないみたいだな。」

「この遠征から帰ってきたらちゃんと告白する」

「ふーん。この数日でレオがラフレのことを大切に思っていることはわかったから、お前たちのために人肌脱いでやるか」

「……………なにするつもりだ？」

「レオは何も気にせず、討伐に集中しろよ」

ふむふむと何か考えながら家へ入っていくロディオ。

「はあ…………」

「どうした？ラフレ。ため息なんてついて」

書庫で外を眺めながらため息をつく、いつの間にか部屋に入ってきていたロディオが書類を読みながら話しかけてくる。

「び、つくりした…………」

「レオのことが心配なのか？」

「うん……………」

「ラフレはレオの強さ知らないもんな。怪我したところ見たことないくらいなんだぞ？でも、まあ、あいつも不死身じゃないからな、油断したら危ないだろうが」

「ど、どうして…………そんなこと言うの……………もつと心配になるじゃない!!」

励ましてくれているのかと思いきや、ただただ心配な気持ちが増えるだけだった。

ボートとしていても仕方がないと思い、日常で使える簡単な魔法を勉強して過ごした。

「魔力の使い方が上手になりましたね」

先生になってくれているロシェが拍手で褒めてくれる。

「ふうー。でもまだまだね。小さな灯りをつけたり、吐息程度の風しか吹かせられないものの……」

「もっと練習すれば自分の中にある魔力を使いこなせるようになりますよ」

もう一度練習しようと、体に力を込めた瞬間、ゴゴ！と勢いよく扉を開かれる音がする。

「ラフレ！！レオニスが……」

「……………レオニス様が……………」

兄の顔は険しく、喜ばしい状況ではないと一目で分かった。

「魔物に襲われた状態で城に帰還してきたみたいなんだ……」

「そ、そんな……………いい、行かないとっ……………！！！」

馬車を用意してもらい、王城へ急ぐ。

「ラフレ様、そんなに強く手を握ってしまっていると、皮膚が傷ついてしまいますよ」

ロシェがそっと、手を握ってくれる。温かくて安心する。深呼吸をして、どうにか落ち着かせる。

「レオニス様は強い方ですから、怪我と言っても大事に至らないと思いますが……」

みんな同じことを口にする。強いと言っても、怪我をしないわけじゃない。遠征に旅立った時からずっと、レオニス様の甘い表情が頭から離れなかった。レオニス様が怪我をして、痛い思いをしていたらどうしよう、死んでしまったらどうしようそんなマイナスなことから考えていた。

「ふっ……うう……レオニス様、に、会いたい」

「もう王城に入りましたから」

ロシエは、ロディオの言葉を信じていないみたいで、馬車の中でもずっと、本当にレオニス様が怪我をしたのか？とブツブツ呟いていた。

馬車を降りると、ナース服の侍女たちがセカセカとものを運んでいる。ただ、尋常なほど現場が重苦しい雰囲気包まれている感じはしなかった。レオニス様が怪我をして帰還するくらいなのだから、とんでもない量の死傷者が出ていると思っていたのだが。

「あ、あのっ……レオニス様はどちらにいらっしやいますか？」

「ああ、この奥の療養所にいらっしやいますよ」

侍女の様子から見ても、それほど重症でないように思えたが、自分の目で確かめないと

安心できないと、小走りで療養所へ向かう。

療養所の扉を開けると、怪我をしている患者の奥の方に、医師と何か話しているレオニス様の姿が確認できた。

「よ、よかった……………レオニス様、無事だった……………」

目に涙をいっぱい溜め、棒立ちになっている私に気がついたレオニス様が驚いた顔をしながら、向かってくる。

「ラフレ……………!? どうしてここにいるんだ?」

「レオニス様……………!」

人目も気にせず、抱きつく、ぎゅつと大きな手で抱きしめ返してくれる。

ふんわりと香ってくる石鹸の匂いが心地いい。

お兄様に、レオニス様が怪我をしたって聞いて、心配で……………ふっ……………うう」

「怪我?……………ロディオめ……………私のことが心配でそんなに焦ってここまできてくれたのか?」

「ん……………そうです……………私……………」

「待って、ラフレ。そこから先は私から言わせてくれ」

近くにいた医師と仲がいいのか、親しげな口調で上の部屋を借りると告げるレオニス様。

大きな手を腰へ回されて上の個室へ連れていかれる。二階は人通りが少なく、静かな雰囲気包まれている。

療養所と思えないほど豪華な作りの部屋で、思わず部屋をキョロキョロと見回してしまう。

「ラフレ、おいで」

ああ、ようやく会えた。涙を堪えて大きな胸へ飛び込む。

「レオニス様っ……！」

「ロディオになんと言われたのかわからないが、私はどこも怪我をしていないよ」

「……お兄様も、誰かと間違えてしまったのでしょうか……でも、よかったです……レオニス様が怪我をしていなくて……それに、いろんなことに気がつけましたから」

「ラフレ……さっきの話に続きだが……」

甘い表情から真剣な表情に変わるレオニス様。

「幼い頃からラフレのことが好きだったんだ。私は、魔力が人よりかなり多い。ラフレも知っていると思うが、魔力が多いと言うことは性欲も強い。そんな性欲をラフレに向けることはできないと幼いながらに自分の気持ちに蓋をしていたんだ。でも、あの日ラフレが私を求めてくれた。たとえ魔力のためだったとして、嬉しかったんだ。ラフレに振り向い

て欲しくて恋人のふりをして欲しいだなんて頼んでしまったが、本当の恋人になって欲しい。ラフレ、愛しているよ」

「れ、レオニス様っ……………私も、好き……………です……………本当の恋人になりたいですっ……………」

……………ちゅっ……………クチュ……………ちゅう、クチュ、ちゅづ……………

「ん……………ふっ……………んん……………だ、ダメですっ……………誰かが部屋に入ってきたら……………」
「大丈夫だ。部屋に入らないように言っている。」

「で、でも……………」

「ラフレだって、久しぶりで我慢できないんじゃないか？我慢できないって顔してるよ」
「う……………（確かに、さっきのキスでスイッチが入ってしまったけど……………）」

「討伐に行く前、無事帰ってこれたらご褒美をくれるって話だっただろう？」

「??はい……………（どうして今、その話をするのだろうか?）」

「今ご褒美が欲しい。ラフレを私の好きにさせてくれないか？」

「……………!!!（そんな子犬みたいな顔で言われたら……………）」

こくんと無言で頷くと、尻尾を振って喜ぶ子犬みたな表情をするレオニス様。

「一ヶ月ぶりだからな。いっぱい気持ち良くなろうね」

一気に表情が変わるレオニス様。

クチュクチュと水音が響く甘いキスは一ヶ月ぶりでもよりふわふわとした感覚に包まれる。

「ん……ふぁっ……んむっ……」

「もうそんな顔してるのか」

チュクチュクと首元、胸元に柔らかい唇を何度も当てられる。その快樂に集中していると、腰の紐が解かれ、ワンピースを脱がされてしまう。

「んぁっ……」

じゅつと乳輪近くを強く吸われて、大きな声が出てしまう。

「しー。ラフレ、ここの部屋に人が入らないようにはしているが、廊下には人が歩いているからね。エッチしてるのバレたくないなら声我慢しないと。バレてもいいならたくさん可愛い声出していいよ」

「う……（声、我慢できる自信ない……）」
バツと、片手で口を抑えて、声が出ないようにする。

「小さい声なら大丈夫だからね」

下着をずらされ、ぷるんと乳首が外に解放される。

「まだ、触つてもないのに乳首勃起してるね。ラフレの乳首、ピンと勃つてて可愛い……」

「あっ……………んあ……………ふっ……………うう」

口を抑えて、喘ぎ声を我慢する。

レロッと温かい舌で先端を舐められ、もう片方も指でぎゅっとなまされる。

「う……………あう……………（久しぶりすぎて、気持ちいいのが強い……………乳首ってこん

なに気持ちよかったっけ……………）」

「声我慢するの上手」

チュクチュクと乳首を交互に吸われ、先端は、滑り、ぽってりとさらに勃起した状態になっている。乳首を責められるたびに、下腹部がきゅっと疼き、蜜穴が濡れ濡れになる。

「ここもまだ触つてないのに濡れ濡れだな」

「んっ……………」

下着越しに蜜穴を擦られ、クチュクチュと音を立てられる。

「あう……………そこっ……………」

蜜穴からクリトリスまでスルスルと軽く擦られているだけなのに、クリトリスに微かに

当たるのがもどかしい。

「ここをもっと触って欲しいのか？腰が動いてる」

「う……………」

下半身へ目を向けると、腰が無意識に動き、レオニス様の指をクリトリスへ擦り付けようとしている。

「あ……………ちがっ……………」

「違う？では、別にクリトリスを触って欲しいわけではないんだな」

腰を無意識に動かしていたことを指摘され、恥ずかしくてクリトリスを触って欲しいと素直になれない。

「久しぶりだからな。もっと、じっくりラフレの体を味合わせてくれ」

ぽすんと、ベッドへ横にされると、額からどんどん下へキスが落とされていく。

「ふ……………耳……………だめえ……………」

乳首をコリコリと指で潰されながら、舌を耳の中に挿入され、クチュクチュと舐め回される。

腰がゾクゾクして、乳首を引っ張られるたびに、快楽が蓄積される。

「耳も乳首も気持ちいいだろう？」

「あう……気持ち、いい……………乳首、乳首がっ……きちゃっ……………うう……………」

ギュッと強い力で乳首を引つ張られ、強すぎる快楽に、絶頂が襲ってくる。

「い、……………くっ……………（乳首、こんなに引つ張られても、気持ち良く感じるようになってしまった………痛いはずなのに、気持ち良くて……………もうっ、もう……………）」

「乳首で甘イキしたみたいだな」

「はあ……………」

「ラフレの肌は蜜のように甘いな」

首をレロッと舐められ、ゾクゾクとした感覚が身体中に駆け巡る。レオニス様は、そのまま、鎖骨、胸、お腹と足にかけてキスを落としていく。

「んっ……………」

敏感な太ももの付け根へ口を近づけられて、レオニス様の吐息がくすぐったくて声が出てしまう。

「腰を少し上げられるか？」

下着を下にずらされる。軽く腰を上げると、するりと簡単に脱がされてしまう。

体を見られるのも久々で、緊張と恥ずかしさでぎゅっと足を閉じてしまっていたのだが、レオニス様が太ももをレロッと優しく舐める。

おまんこに触れるか触れないかギリギリのところにある手かもどかしくて足を擦って紛らわせる。

「愛液がアナルまで垂れているな。もったいない」

そういうと、グッと太ももを持ち上げて、おまんこを見つめるレオニス様。

「やっ……………そんな、見ないでくださいいづ……………」

「久しぶりだから恥ずかしいのか？セックスをする時はいつもラフレのおまんこよく見えて舐めていただろう？」

「ぐうう……………」

「ラフレのお口は素直じゃなくても、おまんこは素直に虐めてほしいって私に教えてくれるみたいだよ」

腰の下にレオニス様の太ももが置かれ、レオニス様の顔とおまんこの距離が近くなる。

「ああ、甘い香りがする。そんなに期待した顔で見つめるな。我慢させてしまった分、たくさん舐めてあげるから」

ぺろっと舌を出しては、どんどんクリトリスに近づけていく。いつ舐められるかわからない状況に目が離せない。

「あ……………あ……………」

ずっとこの瞬間を待っていた。舌がこのまま進めば、クリトリスに当たる。レオニス様のゆっくりな動きに痺れを切らして、腰をグッと下へ近づけるが、舌はクリトリスへは触れず、大陰唇を舐め始めた。

「ふあっ………」

期待していた場所と違っていたが、薄いおまんこ皮膚は敏感でほんの少し舐められたただけで快感に感じてしまう。

「んあ………」

声が漏れないように口を抑えていても、小さな喘ぎは出てしまう。舌の表面を大陰唇を舐め回すと、クパアッと両手で開いて、ひくひくと開閉する密穴を見つめるレオニス様。

「ここがクパクパ開くたびにラフレの愛液が溢れてきているよ」

クパクパと開閉する密穴に舌先が入っていくのが見える。

「ん………らっめえ………」

ぬぼぬぼと何度も抜き差しされる。

「んあっ………ふっ………うう………きもっ、ちい………だめっ………そんなにいっぱい入れちゃだめえ」

「舌を奥まで入れようとするキュッと閉まるな。ああ、アナルまで溢れてしまっている

ね」

そういうと舌を抜いて、アナルの愛液を舐めとるように舌を這わせる。

「やつ……………お尻いい……………き、汚いい……………ダメですう……………」

「ラフレの体に汚いところなどないよ」

アナルの表面を弱い力で舐めたと思えば、皺の中まで舐めとるように強い力で舐めてくる。

「ふぁ……………（お尻の、穴なのに……………！レオニス様に触れるとどこでも気持ちよく感じてしまうう……………」

アナルにつぷりと舌を入れられ、どんどん甘い声に変わっていつてしまう。

「ひくひくしていて愛おしいな。この状態ならここでも気持ちよくなれるだろう。ここはまた今度虐めてあげようね」

アナルから舌が離れ、今度はクリトリスの周りへ舌を這わせられる。

「ん……………そ、こっ……………」

どんどんクリトリスへ近づいてきて、期待で更にぷっくり腫れたように思える。

蜜穴とクリトリスを円で囲むように舌が動き回る。

「ふぁつ……………（あと少しずれば、クリトリスなのに……………！）」

どんなに目で訴えてもクリトリスを舐めてくれないレオニス様。

「ラフレ、ちゃんと言葉にしないであげないよ」

「ふっ……うう……く、リ……舐めて欲しいです………♡」

もう、クリトリスを舐めて欲しくて、我慢できなくて、精一杯お願いする。

「可愛くお願いできたから、いっぱい舐めてあげよう」

「あぁ………♡!!!これっ………これ、気持ちいいのっ………♡」

やっとクリトリスを舐めてもらえて、声を我慢しなければならなかったことを忘れて、甘い声を出してしまう。

ぽってりと腫れたクリトリスを温かい舌がねっとりと包み込み、つぽつぽと吸い上げられる。

「んぁぁ………♡クリ、吸うのだめえっ………」

「どうしてダメなんだ？」

「気持ち良すぎて、おかしくなっちゃうからぁ………♡」

吸い上げられるたびに、腰が上下に動いてしまう。

「いいのか？ラフレのエッチな声が外まで聞こえてるんじゃないか？」

「あ………うう（頭の中がクリのことについていっぱいになって、声我慢するの忘れて

たあ……………」

両手で口を抑えて、また声を我慢しようと頑張るが、クリトリスへの刺激が強すぎて小さな声が出てしまう。

懸命に声を我慢している私を虐めるように、レオニス様は密穴に指を挿入して、敏感なジースポットをトントンと刺激してくる。

「ん……………らめ……………一緒はだめっ……………♡(エッチしてるのバレたくないから、ここでエッチしたくないはずなのに……………！！声我慢することに興奮してるかもしれないっ……………なんでえ……………やあ)」

……………クチュ、クチュ……………ちゅづ、チュパづ……………

「ふづ……………うう……………レオにしゅ、様づ……………きちやう……………」

口元を押さえている手を震わせながらレオニス様に絶頂を知らせると、目を合わせながらさらに責め立ててくる。

密穴に挿入している指が抜けるたびにヌポヌポと卑猥な音が出て、愛液がたっぷり湧き出ているのがわかる。

クリトリスをじゅつと吸われ、体に快樂が走り絶頂の波が襲ってくるのがわかったが、レオニス様の指も舌も動かなくなつてしまつて、行き場のない快樂がもどかしく感じる。

「なんれっつ……（もう少しでイけたのに……！……！……！）」

口元で手をぎゅつと握つて、レオニス様に訴える。

「なんでつて、ラフレはここでエッチなことしてるの、他の人にバレたくないんだろ？ イくとき大きな声を出してしまふからやめてあげたんだよ」

「う……うう……やだあつ……イかせてくださいっ……」

久しぶりだからだろうか？ ギリギリまで登つてきた快樂を我慢することができない。イけるのなら、もう、バレてもいいとさえ思った。でも、1回イくだけなら、手で口を抑えられるなら、声を我慢できる自信があつた。

「バレてもいいのか？」

「声、我慢できるっ……」

「そうか。そんなに自信があるなら大丈夫そうだな。ラフレのおまんこ長い間我慢させてしまったから、いっぱい気持ちよくしてあげようね」

レオニス様の舌がクリトリスへ触れる瞬間に、期待で目が離せない。いつも気持ちいいとたくさん声を出してしまうけど、少しなら我慢できると、頭の片隅に我慢の文字を浮か

べて、口元に手を持っていく。

「ふっ……うう……きもっ、ちいいい………」

……ちゅぱっ……くチュ、くチュ、ちゅっ……ヌポヌポ……

「いっ……くっ……♡♡♡（我慢、声我慢しなきゃっ……）」

できるだけ小さな声で絶頂をレオニス様に知らせる。1ヶ月ぶりの絶頂で、初めての時と同じくらい頭が真っ白になった気がする。

ビクビクと体を震わせて、膣を何度も閉めたはずなのに、レオニス様の舌と指の動きは変わらない。

「え……あ……ふっ……うう……なんでっ……いったのに………」

声が小さすぎて聞こえてないのか、くちゅくちゅとクリトリスを舐めることに集中しているようだった。

「レオっ、にすぎまつ………」

絶頂した時より大きな声で呼ぶと、目を合わせてくれる。

「どうした？ラフレ」

「今つ、イきましたあつ……………」

「本当か？声が小さくて聞こえなかったな。たくさん気持ちよくしてやると言っただろう？遠慮しないでいっぱいいつてごらん」

そのまま、ヌポっヌポっつと、膣の指を早く動かし始めた。

「ふぁ……………」

絶頂したクリトリスには強すぎる刺激で、声のボリュームが大きくなってしまふ。

「ラフレ、声が大きくなってしまったね」

「ごめつ、なさいづ……………」

「ラフレがバレてもいいならいくらでも声出していいんだよ。私はバレてしまっても構わないからね」

ニコツと意地悪な笑顔をしながら、そう言うレオニス様。

「そろそろ挿れてもいいか？」

「ん……………レオニス様にゆっくり、お願いしますず……………激しくされると、いっぱい声出ちゃうのでっ……………♡」

「……………善処するが、久しぶりのラフレだからな。可愛すぎて、理性を保てる自信がない

な。それにこのエッチは私のご褒美でもあるだろう？ラフレを好きにさせてくれるって約束じゃないか」

低く色っぽい声が耳の奥まで響いてくる。

「ん……………そ、でした……………ラフレを好きにしてくださいっ……………声、我慢するの頑張りますっ……………♡♡♡（討伐頑張ったレオニス様のご褒美になるなら、エッチ頑張るっ……………）声だっけきつと我慢できるっ……………」

そんな甘い考えはすぐ碎かれることになる。